九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

詩人とガラス瓶 : ヴェルレーヌの「兄」「姉」をめぐって

倉方, 健作
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/1906126

出版情報：Stella. 36, pp.77-84, 2017-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

詩人とガラス瓶

――ヴェルレーヌの「兄」「姉」をめぐって――

倉　方　健　作

逸話――主題と変奏

詩人ポール・ヴェルレーヌ（1844–1896）の評伝は，巻頭近くで彼の「兄」もしくは「姉」に焦点を当てることを通例としている。性別は不明であり，名前もない。何人かいたのは事実らしいが，正確な人数も未詳である。ヴェルレーヌの母親は，1844 年 3 月 30 日に 35 歳で待望の長男を授かる前に，流産・早産・死産など理由は定かではないが，少なくとも二度胎児を喪っていた。この事実が強調されるのは，彼女が長年にわたりふたつの亡骸を瓶でアルコール漬けにして保存していたというエピソードが存在するためである。

胎児と瓶をめぐる生々しく奇異な逸話は，ヴェルレーヌの生前には知られていなかった。1928 年，ベルギーの地域史研究者が詩人の家系を辿る書籍を出版し，そのなかで初めてヴィクトワール・ベルトランという女性の証言が公表された[1)]。これが現在に至るまで逸話の唯一の拠り所である。その内容は 1869 年 7 月 18 日付の書簡と，おそらくずっと後年の本人の回想から成り立っている。書簡は，ヴェルレーヌ家の親戚が住むベルギーのパリズールからパリに仕事を探しに来た彼女が，自ら目撃した凄惨な場面を同じくパリズールの住人ジョゼフ・ペロに書き送ったものである。ペロはヴェルレーヌを子供の頃から知り，近況を知らせるようベルトラン嬢に頼んでいたらしい。1865 年 12 月 30 日に父親を亡くした若い詩人は，パリのバティニョール地区，レクリューズ街 26 番地で母親と二人暮らしをしており，ベルトラン嬢はその家に滞在した。以下が引用されている手紙の全文である――

バティニョール，1869 年 7 月 18 日

ペロ様

パリズールを出発する際，ポールさんの様子をお伝えすることをお約束しましたの

で，彼の卑しむべき，厭わしい行状を書き送ります。私が着いて３，４日経ったある日，彼は朝の５時に帰宅しました。彼の母親が起きる音が聞こえました。それから彼の部屋で騒ぎが聞こえ，それと同時にヴェルレーヌ夫人〔母親〕が来て，「急いで，起きて，あの子は私を殺そうとしているわ」と私に叫びました。すぐに駆けつけると，その恥ずべき男性が，手に短刀，剣，それから大きなナイフを持っているのが目に入りました。そして母親を殺して自分も死ぬ，と言うのです。私は目の前の光景が信じられませんでした。彼はぞっとするような状態でしたが，彼女は「この子は病気なの，ときどき興奮しすぎるのよ」と言っていました。ですが彼の興奮は，飲酒によるものなのです。それからヴェルレーヌ夫人はローズさん〔ヴェルレーヌの母の姉〕に手紙を書きました。彼女は翌日やってきました。彼はそれが気に入らないようでした。ローズさんは２日間滞在して，その間はそう悪くありませんでした。ローズさんは私に言いました。「この子がお酒を飲むのはわかったでしょう，こんなふうに好き放題をするのに慣れてしまったのよ」，と。

ローズさんが帰った２日後，昨日で１週間が経ちますが，その日，私は夜中に突然物音を耳にしました。彼が帰宅したのです。１時でした。彼は母親を呼んで，友だちをひとり連れて来た，と言いました。彼は騒ぎ始め，天井が落ちてしまうのではないかと心配した可哀想な母親は起床せざるをえませんでした。私は，彼を怒らせるのではないかと怖くて起きられませんでした。ですが突然，叫び声がしたのです。私は起きて，部屋に駆けつけると，彼は剣を手にしていました。母親に躍りかかろうとしましたが，彼と一緒にいた若者が取り押さえ，母親と私で剣を奪い取りました。彼は母親に 200 フラン出せと要求しました。そしてこう言うのです。「俺の金を 4,000 フラン持っているだろう，それを今すぐ俺に返せ」，と。ついに若者も自分の家に寝に帰ってしまいました。彼と，私たち二人だけが残されたのです。一度は，彼は母親をひっくり返し，喉を締め上げて，母親を殺して自分も死ぬと言いました。すんでのところで私が駆けつけて，母親を解放したのです。彼は母親に，生きてこの家から出られやしないぞ，と言いました。ペロさん，私たちはこの不幸な男と，１時から８時まで戦わなければならなかったのです。私の人生で，こんなにおそろしい人を見たことはありません。もし私が同じような息子を持ったら，いますぐ引き取ってくださるよう神様にお願いするでしょう。こんな状態になるのは，アプサントを飲んでいるからに違いないと思います。

この事件のあと，私は母親に，息子と一緒にしばらく出かけることを勧めました。彼女はその晩のうちにファンプー〔アラス近郊の小村，ヴェルレーヌの母親の出生地〕に出かけて，そこに１カ月か６週間か滞在するつもりでした。ですが４日経つと，もう戻ってきました。またなにかあったのだろうと思いました。彼女は違うといいますが，私はそうだと断言できます。

ポールさんの友達が，彼に手紙を書くと約束していたのに書かなかったので，彼が騒ぎ出して，母親が戻る羽目になったのでしょう。彼はまだ滞在していますが，もうローズさんと悶着を起こしているようです。

ヴェルレーヌ夫人は，息子が自分を傷つけたのはこれが初めてだと私に言いましたが，彼女が6月初め，ファンプーに滞在中だとあなたに手紙で知らせたとき，すでにカフェでもめ事を起こしたあとだったことを私は知っています。今回，親子はファンプーに4日しかいられなかったのです。彼はパリに戻りたがりました。このまま滞在を続ければ，近いうちにいつか，彼は犯罪をおこすでしょう。

あなたの幸せな家族を思い出しながら手紙を終えます。

あなたの忠実な女中
ヴィクトワール[2)]

初出では書簡の引用に続いて，ベルトラン嬢は後年結婚してティック夫人となり，1928年にパリズールで80年に及ぶ生涯を終えたと書かれている。さらに同書では，書簡に記されていないヴェルレーヌの蛮行の叙述が出所を明らかにしないまま続いている。その晩年にかつてのベルトラン嬢から著者が詳細を聞き出したということだろう。内容は以下のようなものである――

酔って夜中に帰宅すると，彼は再びヴェルレーヌ夫人に暴言を吐いて金を要求したが，いままで払ってきた犠牲のことを彼女が思い切って話に持ち出すと，彼は怒り心頭に発して，食器を壊し，ガラス瓶を床に投げ捨てた。そこには哀れにもノイローゼになった彼女の母親が，不毛な妊娠の胎児を保存していたのだった。〔…〕詩人は，杖をふるって容器を戸棚の下に打ちつけ，その残骸にこう繰り返しながら躍りかかった。「くそくらえ，瓶め！」――彼は「ボカルス bocalce」と発音していた――「金をよこせ，くそくらえ，瓶め！」[3)]

「瓶」の複数形を «bocaux» ではなく «bocals» と言っていた，という細部には立ち会った者ならではの臨場感がある。この騒動のあと，母親は泣きながら胎児を拾い集めて中庭に埋め，ベルトラン嬢と一緒に知人の家に避難したという。そして3日後に母親はベルトラン嬢に促されて「これまで以上に一人息子になった」ヴェルレーヌのもとに帰ったとして逸話は結ばれる。

この凄惨な場面は，事後の経緯の相違からも書簡で語られた事件とは別の出来事であるようだが，1933年にエピソードを初めて評伝に盛り込んだフランソワ・ポルシェは同一の出来事として扱っている[4)]。しかもポルシェは，複数としかわからないはずの瓶の数を3個とした。前述したとおりベルトラン嬢の回想が逸話の唯一の出典であり，公表されているいかなる資料にも数字の確たる根拠はない。しかし，この数字は検証されないまま踏襲されることになる。博

士論文でヴェルレーヌの精神分析を試みたアントワーヌ・アダンは1936年の著書において，胎児を瓶に保存していた母親の行為を「このような行為は病的な精神状態の発露である。ポール・ヴェルレーヌの家系に彼の不幸な運命を解釈するための特性があるとすれば，彼の祖父のアルコール中毒ではない。彼の母親の，3回の失敗の忌まわしい記憶への病的な執着である[5)]」と断言した。以降も3という数字は想像力を刺激し，英国の劇作家クリストファー・ハンプトンの戯曲『皆既食』では胎児にそれぞれニコラ，ステファニー，エリザという名前があったとされ[6)]，近年ではギ・ゴフェットが，3人の胎児は詩人がやがて愛を捧げるが早世してしまう3人の人物，従姉のエリザ・モンコンブル，アルチュール・ランボー，教え子のリュシアン・レチノワの前触れだとの解釈を示した[7)]。その一方，ピエール・プティフィス，アンリ・トロワイヤの評伝はともに胎児を2人と書き[8)]，アラン・ビュイジーヌは4人としているが[9)]，各自がいかなる資料に拠って数字を確定したのかは明示されていない。

検証と解釈

長年にわたって評伝の冒頭に色を添えてきた胎児と瓶をめぐる逸話は，ヴェルレーヌ研究者による検証を受ける機会をほぼ持たなかった。その理由は，伝記的事実との表層的な結節を，あるいは（かつてアダンが試みたような）十全に科学的であるとは認めがたい精神分析の適用を避けようとする研究傾向と無関係ではないだろう。作品や作家との関連を脇に置くとしても，胎児を瓶に保管するという行為が同時代的にどの程度「病的」だったのかという点も考慮されず，イメージの異様さのみが強調されてきたきらいがある[10)]。

詩人としてのヴェルレーヌと逸話を絡めて検証した場合，もっとも重要な点は，彼自身が「兄」もしくは「姉」の存在を，いかなる文章においても言及していない点にある。酩酊の末に，自らの乱行はともかく，瓶とその中身の存在まで忘れてしまったとは考えにくい。自身と母親の名誉に大きく関わるためありのままに記すことが難しいのは当然にしても，フィクションの体で作品に反映させることもなかった。親しい友人がヴェルレーヌから打ち明けられた形跡もない[11)]。

だが，これまで指摘されてこなかったが，実際にはヴェルレーヌは間接的ながら「胎児」に言及している。1886年に執筆され，2年後に人物紹介紙『今日

の人びと』の第 335 号に掲載されたシャルル・クロに関する文章の一節である。文中でヴェルレーヌはクロの短編小説『愛の科学』の内容，とりわけ作品に挿入された四行詩を称揚する――

> たとえば彼の奇妙な短編小説『星間通信』や，特に『愛の科学』を読んでみるがよい。あらゆる尺度が壮大な冗談のなかにあるような残忍な風刺作品である。一杯機嫌の作者が，作中の好青年に責任をかぶせてでっちあげた「恋歌」のとてつもない詩句を，私は楽しく何度も読み返している。この好青年は若い女性下宿人に恋い焦がれており，この女性はそう間抜けではないが，地獄の業火のごとく知的な炎で燃える「愛」のために，彼は彼女をおそろしく愚かだと思っている。それゆえ彼はブルジョワ的夜会のさなかに，彼女と彼女の両親，そして彼女の持参金を捉えようと，この詩句を大真面目に彼女に向かって「甘くささやく」のである。
>
> 　　瓶のすぐそばで
> ……
> 私は，彼が白い取り外し襟を付けて，
> 威厳に満ちて潑剌と検事代理を務める姿を目にした。
> アルコール漬けでなかったら，
> どれだけの大仕事を成し遂げたことか！ [12)]
> ……

クロの詩句を興奮気味に紹介しながら，ヴェルレーヌの説明はやや言葉足らずである。出典となった『愛の科学』では，詩句の直前の文章は次のようになっている――

> 一度流産をした経験を頻繁に語る D***夫人に「女性とは，経済的観点と社会的観点から言えば，胎児の製造工場と見なせますし，そう見なすべきです」と言った。そして『揺り籠のそばで』のメロディに乗せて，『瓶のそばで』と題された W***のシャンソンを何節か口ずさんだ。[13)]

両者を対照すると，いくつかの相違点に気がつく。ヴェルレーヌの文では「瓶のすぐそばで Auprès d'un bocal」だが，『愛の科学』における歌の題名は「瓶のそばで Près d'un bocal」である。歌を聞かせる相手も若い女性ではなく女性の母親であり，そもそも『愛の科学』では女性が下宿をしているという描写もない。またクロに『星間通信 *Correspondance interastrale*』という作品は存

在せず，おそらく『星間のドラマ *Un drame interastral*』の思い違いである。これらの誤りから判断するかぎり，クロの紹介文を書くにあたってヴェルレーヌが『愛の科学』を再確認したとは考えにくい。それにも関わらず，引用されている詩句だけは，よほど愛誦したものか，句読点を除いて正確である。

クロが明らかにしているとおり，「瓶のそばで」は一種のパロディである。アルフレッド・ネットモンの詩にイポリット・ルーエルが曲をつけた「揺り籠のそばで Près d'un berceau」は，1840年代から歌い継がれた流行のシャンソンであった[14)]。内容は，新生児の寝顔を見つめる母親がわが子の将来を次々に夢想するといったものであり，将軍・司祭・音楽家などの将来像を思い描く間に「それまでのあいだ，私の膝の上で／お眠りなさい，青い瞳の天使」という2行のルフランが2回繰り返される。音節数も合致しており，「瓶のそばで」の四行詩はこのルフランを念頭に書かれたものである。こうして「アルコール漬けでなかったら」と歌うパロディの皮肉は一段と明白になる。

「瓶のそばで」の詩句を「楽しく何度も」繰り返し読んだというヴェルレーヌの脳裏には，いかなる思いがあっただろうか。「兄」もしくは「姉」は全員瓶に入れられた。だが運良く瓶に入れられることなく，生きて詩人となった自分自身は「大仕事」を成し遂げようとしている。アルコール漬けとなり，そして「弟」に瓶を叩き割られて二度死んだ「兄」や「姉」と紙一重の差で手に入れた人生は，この上なく稀少にも，なくてもともとのようにも思える――「胎児」を笑う姿に，こうしたヴェルレーヌの人生観を認める評伝作家がいてもよさそうなものだが，そのような指摘はこれまでなされてこなかった。

分際を越えて「心理」を扱う危険は避けるべきだが，文学研究の枠内で次のような指摘も可能である。ヴェルレーヌが強く影響を受け，ロールモデルとしても意識したふたりの文学者は，ともに詩人の誕生を題材とする詩篇を残している。『秋の木の葉』の冒頭で「今世紀は2歳だった」と書いて自身の誕生を物語ったヴィクトル・ユゴーと，『悪の華』の詩篇「祝福」で詩人の呪われた誕生を描いたシャルル・ボードレールである。だがヴェルレーヌは，とりわけ晩年には数々の露悪的な詩篇を書きながらも，自らの「誕生」は決して題材としていない。クロの紹介文における『愛の科学』からの引用は，この禁忌への例外的な抵触である。しかし，そこでも「胎児」という語だけは自らの手で書くことはしなかった。

1990 年代半ばにビュイジーヌ，トロワイヤによる評伝が相次いで刊行されたが，爾来ヴェルレーヌの伝記は 20 年以上書かれていない。だがその間，作品の校訂と解釈は飛躍的な進歩を遂げた。検証を欠いた逸話の再生産，精神分析の拙速な敷衍を過去のものとして，いわば評伝の空白期にある現在は，研究の豊かな蓄積が新たなヴェルレーヌ像を帰納的に導き出す途上にあるものと信じたい。

註

1）Léon Le Febve de Vivy, *Les Verlaine*, Bruxelles : Miette, 1928.

2）*Ibid*., pp. 64-66（repris dans Paul Verlaine, *Correspondance générale*, t. I, éd. Michael Pakenham, Paris : Fayard, 2005, pp. 164-165）. 初出と再録で改行に相違があるが初出に従った。ベルトラン嬢が知人に書き送った他の書簡も，少なくとも 1980 年代まで現存していたが，ジョゼフ・ペロの娘クラリスに宛てた 1870 年 1 月 25 日付書簡の一部が研究書に引用された一例を除き（voir *Paul Verlaine en Ardennes*, Lyon : La Manufacture, coll. « Les Classiques Ardennais », 1985, p. 69），今日まで公表されていない。

3）Le Febve de Vivy, *op. cit.* pp. 66-67.

4）Voir François Porché, *Verlaine tel qu'il fut*, Paris : Flammarion, 1933, p. 113. 同書は前年から文芸誌に連載していたヴェルレーヌの評伝を基盤とする。

5）Antoine Adam, *Le Vrai Verlaine : essai psychanalytique*, Paris : Droz, 1936 ; Genève : Slatkine Reprints, 1972, p. 10.

6）Voir Christopher Hampton, *Total Eclipse*, London : Faber & Faber, 1969.

7）Voir Guy Goffette, *Verlaine d'ardoise et de pluie*, Paris : Gallimard, coll. « L'un et l'autre », 1996 ; coll. « Folio », 1998.

8）Voir Henri Troyat, *Verlaine*, Paris : Flammarion, 1993 ; Libre de Poche, 1996, p. 5, et Pierre Petitfils, *Paul Verlaine*, Paris : Julliard, 1981, p. 12. トロワイヤの伝記にはヴェルレーヌ研究者側から厳しい評価が下されている―― voir Yann Frémy, « Henri Troyat, *Verlaine*（comptes rendus）», *Revue Verlaine*, n° 5, 1997, pp. 184-189.

9）Voir Alain Buisine, *Verlaine. Histoire d'un corps*, Paris : Tallandier, 1995. 評伝の執筆にあたってビュイジーヌが選択した執筆態度については以下の書評に詳しい――岡由美子「A・ビュイジーヌ『ヴェルレーヌ』」，『ステラ』第 19 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2000 年 9 月，153–156 頁.

10）19 世紀後半に胎児が持っていたイメージと，その文学への適用については以下の研

究書に詳しい―― Évanghelia STEAD, *Le Monstre, le singe et le fœtus : tératogonie et décadence dans l'Europe fin-de-siècle*, Genève : Droz, coll. « Histoire des idées et critique littéraire », 2004. 当時の社会における胎児の扱い全般については文学研究の枠を越えた調査が必要であろうが，文学作品にあらわれた出産を取りあげた19世紀末の書物に再掲されているイラストは注目に値する。書棚の上に胎児の入ったガラス瓶が置かれ，それを見た掃除中の女中が「こんなに若いのにもうアルコール浸りとはね！」と呟いている，という構図である（voir Gustave Joseph WITKOWSKI, *Les Accouchements dans les beaux-arts, dans la littérature et au théâtre*, Paris : G. Stenheil, 1894, p. 208）。一方で，個別の事象として見た場合，ヴェルレーヌ一家は長男の誕生後，軍人であった父親の任地に従ってメッス，モンペリエ，再びメッスと移住している点には留意したい。1851年の上京後も市内で数度転居を繰り返しており，その都度母親が大事に瓶を運んでいた姿を想像すれば，やはりそこにある種の「執着」を感じざるをえない。

11）トロワイヤは，母親が親しい知人たちには戸棚を開けてアルコール漬けの2人の胎児を見せたと書いている（voir TROYAT, *op. cit.*, p. 5）。またハンプトンの戯曲『皆既食』では，ヴェルレーヌがランボーに「兄」と「姉」の存在を打ち明ける場面があり，両詩人の関係が深化する契機となっているが，いずれも想像の産物である。

12）Paul VERLAINE, « Charles Cros », *Œuvres en prose complète*, éd. Jacques Borel, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1972, p. 814.

13）Charles CROS, « La Science de l'Amour », in Charles CROS et Tristan CORBIÈRE, *Œuvres complète*, éd. Louis FORESTIER et Pierre-Olivier WALZER, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1970, p. 228. 文中の「D***夫人」とは女性の母親，「W***」とは主人公の詩の師である。初出は『新世界評論』誌1874年4月1日号。1885年『黒猫』誌に分割して再録されたのち，没後1908年刊行の作品集『鉤爪の首飾り』に収められた。

14）Voir Edmond BIRÉ, *Alfred Nettement : sa vie et ses œuvres*, Paris : Victor Lecoffre, 1901, pp. 232-233.